

行為連鎖の観点から見た中国語の“被”構文

三宅 登之

1. はじめに

現代中国語では、広く「受身」¹のヴォイスを表すのに介詞“被”等を用いて次のような文が使われる。

(1) 小王被汽车撞伤了。(王さんは車にはねられてけがをした。)

(1)では、述語動詞は“撞”(ぶつける、はねる)という動作であり、その動作の受動者(patient/受事)“小王”(王さん)が主語に立ち、動作主(agent/施事)“汽车”(自動車)が、受身を表す介詞“被”の目的語の位置に置かれている。統語的には“被汽车”という介詞句全体が、その後の動詞句を修飾する連用修飾語となっている。

ある2項動詞の表す動作行為、参与者(動作主と受動者)、受身を表す介詞が文の中に表出されていれば、意味上はそれで受身の事態を表すのには十分であるような感じもするが、実際には中国語では述語動詞の後に、(1)の“伤”のような結果補語や助詞“了”を伴わないと、受身文が成立しないのが普通である。

本稿ではまず、広く受身の関係を、現代中国語ではどのような表現で表すかを概観し、本稿で特に観察対象とする“被”構文の受身表現の体系中での位置づけを確認する。次に、“被”構文の述語動詞にどのような付加成分が用いられるかを記述し、その用いられる動機付けについて認知的な解釈を施す。このことにより、いわゆる「意味上の受身文」と“被”構文がどのような関係にあるかについて、統一的な解釈を試みる。

2. 中国語における受身の表し方

中国語の受身表現の全体像を示すため、ここでは受身表現として、受動者が主語の

¹ 先行研究においても「受身文」「受動文」「被動文」や、または「文」が「表現」になったものなど、様々な名称が用いられている。もちろんそれぞれが先行研究において全く等価に用いられているというわけではないが(特に「文」と「表現」)、本稿では特に断りのない限りは「受身文」「受身表現」のように「受身」という用語で統一する。なお、「被”構文」とは、その中で介詞“被”を用いた特定の構文を指す。

位置に立った「意味上の受身文」まで広く含めて考察する。

このように、先行研究で言及がありそうなものを広く受身表現として含めると、中国語の受身表現は、介詞“被”のような受身のマーカーを用いたもの、動詞のような個別の語彙で受身を表すもの、受身の明示的なマーカーを全く用いないものの、3つのタイプに分けることができる。以下それぞれについて述べる。

2.1. 介詞を用いたもの

中国語の受身は“被”等の介詞（前置詞）を用いて表される。受身を表す介詞には“被”以外にも、“叫”“让”“给”がある²。介詞“被”“叫”“让”“给”は受身文でそのどれを使っても基本的に表す意味は同じで、言い換え可能な場合も少なくない。ここでは注意すべき相違点として、以下のような点を挙げる。

2.1.1. 文体上の違い

“被”は共通語（“普通话”）として書面語と口語ともに用いられるが、“叫”“让”“给”は主に口語のみで用いられる³。周一民(1998:222)は、

(2) 北京口語里没有介词“被”。表示施事或动作行为主体主要用“让”和“叫”，偶尔也用“给”。(北京の口語には介詞“被”はない。動作主や動作行為の主体を表すには、主に“让”と“叫”を用い、時折“给”も用いる。)

と指摘しており、共通語ではなく北京語レベルになると、“被”は使われないということがわかる。“给”はもともとは授与を表す動詞だったものが文法化が進んだ介詞で、口語で用いられる⁴。“叫”“让”も口語で用いられる介詞で、この2つは使役義を表すマーカーも兼ねている点が大きな特徴である。

(3) 墨水瓶叫弟弟打翻了。(インク瓶が弟にひっくり返された。)

(4) 碗让他打破了。(お碗が彼に割られた。)

² これらの使い分けの詳細については讚井・徐(1990)や、陈力(2002)を参照。

³ 実は先行研究の記述を細かく見ると微妙な違いも認められる。例えば李曉琪主编(2003:372)では、“叫、让”一般用于口語，“被”多用于书面語”とし、基本的には“被”は書面語で用いられるとの認識を示すが、张斌主编(2001:30)では、“叫、让、给”表示被动，主要用于口語，而“被”不受限制”とし、“被”は「口語のみ」という制約を受けないと述べ、口語と書面語の両用であることを示している。

⁴ 詳細は木村(2005)を参照。

(5) 东西都给雨淋湿了。(物が全て雨にぬれてしまった.)

文体上の差異が統語上に反映される現象として、次のような点が挙げられる⁵。

3.2.2で述べるように、“被”には動詞句の前に助詞“所”を挿入した“被～所～”という書面語的色彩の濃厚な型がある。

(6) 他万万没想到，会被最好的朋友所欺骗。(彼は最も仲の良い友人から騙されるとは夢にも思わなかった.)

この型は“叫”“让”“给”を用いると文が成立しない。

(7) *他万万没想到，会叫最好的朋友所欺骗。

(8) *他万万没想到，会让最好的朋友所欺骗。

(9) *他万万没想到，会给最好的朋友所欺骗。

本来口語で用いる介詞を書面語的な成分と共起させることができない点が、これらの文が成立しない原因になっていると考えられる。

一方、その“所”を挿入する箇所に“给”を入れた言い方があるが⁶、この“被～给～”という型は逆に専ら口語で用いられるので、“被”だけでなく“叫”“让”でも成立するが、“给”は用いることができない。(13)が成立しないのは、2つの“给”が同音衝突するためであると思われる。

(10) 刚才他又被经理给批评了一顿。(さっき彼はまた支配人に叱られた.)

(11) 刚才他又叫经理给批评了一顿。

(12) 刚才他又让经理给批评了一顿。

(13) *刚才他又给经理给批评了一顿。

2.1.2. 統語上の違い

⁵ 白晓红、赵卫编著(2007:150)より。

⁶ この“给”は介詞ではなく助詞である。この“被～给～”の言い方は口語でしか用いられないし、しかも北方語に限られる。张斌主编(2001:23)を参照。

“被”は、その後に本来伴う動作主を省略し、直接述語動詞と結ぶことができるが、一般に“叫”“让”ではその後の動作主を省略できない⁷。

(14) 他被打断了一条腿。(彼は足を1本折られた.)

(15) *他叫打断了一条腿。

(16) *他让打断了一条腿。

この、

(17) 钱包被偷了。(財布が盗まれた.)

(18) 这一点已经被证明了。(この点は既に証明された.)

のような、その後に動詞と直接結ぶ“被”を、介詞ではなく助詞として品詞を別扱いするものもあるが⁸、本稿では“被”の後に動作主がある型とない型の連続性を後に示すため、このような品詞を別立てする立場は採らない。

2.1.3. 意味上の違い

受身文は、話し手の意図の及ばないところである他者からの行為の影響を被るという意味論的な動機から、迷惑や被害を表す場合に用いられるのが本来の姿である。そしてそれが現在も受身文の主な意味であることには変わりはない。例えば張斌主编(2001:28)によると、

(19) 他听见了刚才说的话。(彼は先ほど言った話を聞いた.)

(20) 刚才说的话被他听见了。(先ほど言った話が彼に聞かれてしまった.)

では、(20)は必ず「彼に聞かれたくないこと」を聞かれてしまったという意味になるという。また、述語動詞の部分の意味の違いによって、以下のような相違が生じる。

⁷李曉琪主编(2003:373)では“叫”“让”はその後の動作主を省略することは出来ないと明言しているが、呂叔湘主编(1999:463)や、齊沪揚主编(2005:295)では、“让”の後では省略不可としながらも、“叫”の後の動作主は「ほとんど」省略されることはない(““让”后的名词不能去掉，“叫”后的名词很少去掉”)し(齊沪揚主编 2005:295)，“叫”の後の動作主は時には省略されることもありうることを示唆している。

⁸呂叔湘主编(1999)など。

- (21) 李四被张三打了一顿。(李四が張三に殴られた.)
- (22) *李四被张三赏了十块钱。(李四が張三に褒美の 10 元を与えられた.)
- (23) 张三被人毒死了。(張三が人に毒殺された.)
- (24) *李四被人医好了。(張三が人に病気を治された.)

“叫”“让”“给”を用いた受身文は、迷惑や被害にのみ用いられるが、一方“被”構文は、書面語において西欧語の影響を受けてそのような伝統的な制約から逸脱しており、良いことや好ましいことにおいても用いられる。

- (25) 他被选为人民代表。(彼は人民代表に選ばれた.)

このような受身文の感情色彩の問題は非常に大きなテーマで先行研究も多いが、本稿では紙幅の関係でこれ以上議論に立ち入ることはできない。

2.2. 動詞等の語彙で受身の関係を表すもの

受動表現の中には、“被”等の介詞を用いるわけではなく、用いられている述語動詞の実義的な意味によって受身的な表現を構成するとして、広義の受身表現の中にも含まれるものもある⁹。

- (26) 去年这个地区遭了严重的水灾。(去年この地区は甚大な水害を被った.)
- (27) 他挨了批评。(彼は叱られた.)
- (28) 这个孩子常受别人欺负。(この子はしばしば他人からいじめを受ける.)
- (29) 代表团在机场受到了热烈的欢迎。(代表団は空港で熱烈な歓迎を受けた.)

例えば(26)では、“遭”((災難や不幸なことに) 遭う、見舞われる)という述語動詞の意味から、主語の“这个地区”が水害に見舞われるという受動者になり、従ってこの文は受動者が主語の位置に立った受身表現であると考えられるわけである。ただし、先行研究においても、受身表現の中にこのようなパターンのものも含めるものは、比較的少ないものと思われる。

⁹白晓红、赵卫编著(2007:152)など。

2.3. 受身を表す語彙を用いないもの

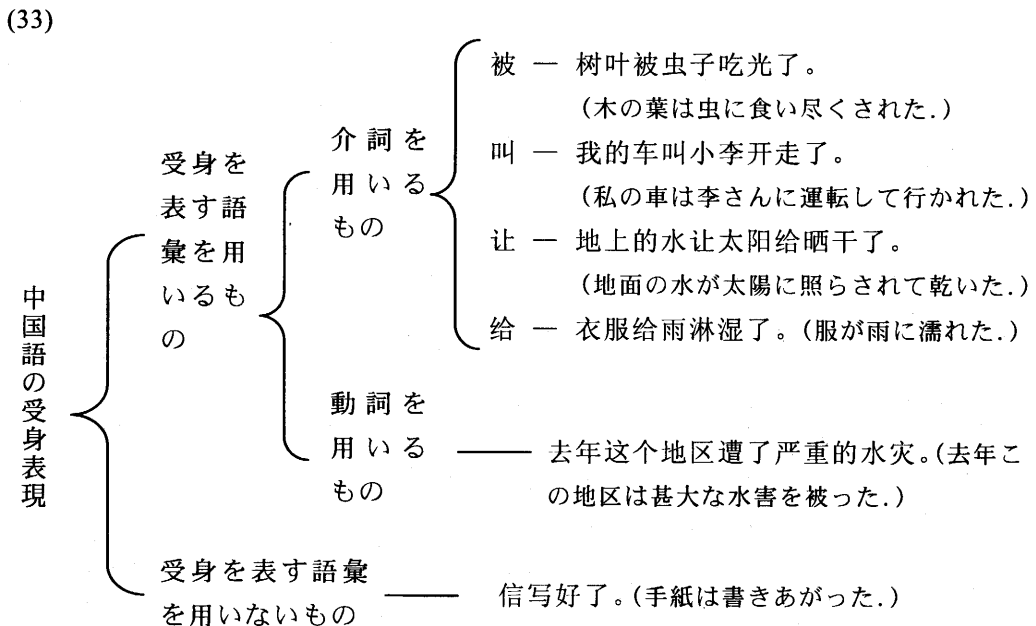
ここで述べるのは、介詞等の明確な受身を表す語彙を用いず受身の意味を表すとされるもので、従来「自然被動文」「意味上の受身文」等の名称で呼ばれてきたタイプの文である。本稿では意味上の受身文と呼ぶこととする。

- (30) 问题解决完了。(問題は解決した.)
- (31) 那辆车已经修好了。(あの車はもうきちんと修理した.)
- (32) 签证取回来了。(ビザは取って帰ってきた.)

このタイプの文は、主語の位置に立つ参与者が述語動詞の受動者であるという意味関係になっていることから、広義の受身表現と扱われることが少なくない。ここでは広く中国語の受身表現全体を概観するため、一応分類の中に含めておく。このタイプの文に対する本稿の立場と、“被”構文の関係については、後に詳しく述べる。

2.4. 中国語の受身表現の分類

以上のことをまとめると、中国語で従来受身表現と扱われてきたものは、以下のよ
うな分類をなしていると考えられる。



本稿では、このうちの介詞“被”を用いた受身文を“被”構文と称し、次章以降ではこの“被”構文に焦点を絞って議論する。最後には更に、“被”構文と意味上の受身文との関係を、行為連鎖という観点から分析する。

3. “被”構文の述語動詞の付加成分

3.1. 教育上の“被”構文の提示の仕方をめぐって

中国語教育の場において“被”構文を提示する場合、その構文の構造を一種の公式として提示することも多いが、その場合、述語動詞の部分に「その他の成分」という成分を付加させて提示することが多い。例えば、次のような中国で出版された外国人留学生向けの教科書の提示が典型的なものである。¹⁰

(34) 主語（受事） + 被 + 介词的宾语（施事） + 动词 + 其他成分

同書のこの“其他成分”については、

(35) 谓语一般不是一个简单的动词，往往还有动态助词“了，过”，补语，宾语，状语，能愿动词等，说明动作的结果，程度，时间等。（述語は一般に単純な動詞ではなく、しばしばアスペクト助詞“了，过”，補語，目的語，連用修飾語，助動詞などがあり，動作の結果，程度，時間等を説明する。）

という解説が付されているので、具体的には“了”“过”結果補語や方向補語などの補語，目的語などが想定されていることがわかる。ただ，“状語”（連用修飾語）と“能愿动词”（助動詞）が挙がっているということは、語順としては述語動詞の前に位置するものも想定されているということで、(35)の解説は(34)の提示例との間で若干整合性を欠くものであると考えられる。

次に日本で出版されている中国語の学習書での提示例を1例だけ見てみよう。次のような表が掲載されている学習書がある¹¹。

¹⁰ 樊平、刘希明、田善继编 1988『现代汉语进修教程语法篇』（北京语言学院出版社）。

¹¹ 相原茂・石田知子・戸沼市子 1996『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書』同学社。

(36)

ウケテ	被	シテ	動詞	プラス α
窗户	被	小王	打	碎了。
我的自行车	被	弟弟	骑	走了。
我	被	爷爷	说	了一顿。
我的钱包	被	小偷儿	偷	走了。

ここでは上記のように「プラス α 」という呼び方で動詞の付加成分が明示され、

(37) 動詞の後ろには一般に、

V プラス α

という形で「～された」結果を表す何らかの成分 α を伴います。

という、動詞の後に他の成分を付加させなければならないという点を視覚的にも強調した図を付した上で、解説がなされている。

ではまず、“被”構文の動詞に付加されるこの「その他の成分」には、いったいどのようなものがあるか、以下に確認してみよう。以降では、特に断りのない限り、このような“被”構文の述語動詞に付加される「その他の成分」を「付加成分」と呼ぶこととする。

3.2. 付加成分の分類

さて、実際の“被”構文において、述語動詞の付加成分にはどのようなものがあり、述語動詞がどのような操作を経て、単独の動詞から複雑な成分になっているかを見よう。

いくつかの文法概説書や工具書の挙げている項目¹²を総合してみると、“被”構文の述語動詞を複雑化させる付加成分には、その位置に基づいて分類すると以下のようなものがある。

¹² 吕叔湘主编(1999), 张斌主编(2001), 侯学超编(1998), 李临定编著(1999), 齐沪扬主编(2005), 刘月华等(2001)等より。

3. 2. 1. 述語動詞の後ろに置かれるもの

[1] “了”

- (38) 他被一个坏人骗了。(彼は悪人に騙された.)
(39) 这个秘密又被人发现了。(この秘密はまた人に見つかった.)
(40) 我的发言被主席取消了。(私の発言は議長に取り消された.)

アスペクト助詞の中で、まず“了”が述語動詞に付加されると“被”構文が成立するという指摘がある¹³。(38)から(40)の、それぞれ文末の“了”がそうである。しかし、木村(1981)、木村(1992)が指摘するように、“被”構文には動詞に“了”のみが後接されていても文が成立しないものも存在する。

- (41) *我被他等了。(私は彼に待たれた.)
(42) ?手表被木村修了。(腕時計は木村さんに修理された.)

この問題については後に詳しく述べる。

[2] “着”

- (43) 那些资料一直被我保存着。(あれらの資料はずっと私に保存されている.)
(44) 大地被月光覆盖着。(大地が月の光に覆われている.)

[3] “过”

- (45) 你小时候被妈妈打过吗？(あなたは小さい頃お母さんに叩かれたことがありますか.)

動詞に付いて“被”構文を成立させるアスペクト助詞として“了”は多くの先行研究が指摘しているが“着”と“过”は指摘していないものも多く、実際その実例は少ないようである。上記3つの、“被”構文を成立させるため動詞に付加するアスペクト助詞についても、先行研究の指摘に若干の出入りがある。侯学超編(1998)は“了”“着”“过”の3つを挙げるが、李临定編著(1999)や齐沪扬主编(2005)は“了”と“过”の

¹³ 上記の例のように「動詞+“了”」が文末に位置した場合には、この“了”はアスペクト助詞“了₁”と文末の語気助詞“了₂”が融合したものの“了₁₊₂”となる。このような分析になっても本稿の議論には影響しない。

みを挙げ“着”は除いており、張斌主編(2001)は“了”しか挙げていない。興味深いのは刘月华等(2001)である。同書は2001年に発行された増訂本であるが、元々の版(以下、旧版と称する)は1983年に発行されている。この旧版では“被”構文を成立させるため動詞に付加するアスペクト助詞として“了”と“过”が挙がっていたが(483頁)、増訂本になってその記述から“过”が削除されている(757頁)。

[4] 結果補語

(46) 那本书被小王借走了。(あの本は王さんに借りて行かれた。)

(47) 花儿被风刮倒了。(花が風に吹き倒された。)

(48) 我被一阵敲门声惊醒了。(私はドアのノックの音に驚かされ目が覚めた。)

(46)“走”，(47)“倒”，(48)“醒”が結果補語である。後述するように，“被”構文においては動作の結果を明示することが極めて重要になるので、動詞の後に付ける成分としては結果補語が典型的な成分であると考えられる。木村(1981)、木村(1992)は結果補語を“被”構文における極めて重要な文法範疇だとしているし、木村(2000)においても，“被”構文に対して最も適性の高い述語形式は「VR 構造」、即ち動詞+結果補語の動補連語であるとしている。

[5] 方向補語

(49) 她被人从河里救出来了。(彼女は人に川から助け出された。)

(50) 那本书被他藏起来了。(あの本は彼に隠された。)

(51) 小王被小李推了出来。(王さんは李さんに押し出された。)

(49)“出来”，(50)“起来”，(51)“出来”が方向補語である。意味論的には方向補語も広い意味で動作の結果を表すと言えるので、これらは結果補語に準じるものとして扱うことが可能である。

[6] 様態補語

(52) 她被他气得连饭也没吃。(彼女は彼に気分を害されて食事さえ食べていない。)

(53) 孩子被你惯得越来越不听话了。(子どもがあなたに甘やかされてますます聞きわけがなくなった。)

(54) 轮船被海风吹得东摇西晃。(汽船が海風に吹かれて揺れ動いている。)

様態補語は動詞の後に助詞“得”を介してその動作の程度や結果の様態を表す補語である。何らかの結果が発生しないと、その行為の程度や結果は言い表しようがないわけで、様態補語も広い意味で行為の結果を示す、結果補語に準じるものであると扱うことが可能である。木村(1981)、木村(1992)は結果補語の枠をやや広めにとり、このような様態補語も含めるとしている。

[7] 介詞句補語

- (55) 往事已被他深深地埋在记忆里。(昔の事が彼の記憶の中に深くしまいこまれた.)
(56) 小张被大家推选为代表。(張さんは皆に代表に選ばれた.)
(57) 那本书被我送给小王了。(あの本は私によって王さんに差し上げられた.)

“在”“为”“给”などの介詞が目的語を伴い、その介詞句全体が動詞の後に置かれた形である。(55)では介詞句“在记忆里”が、(56)では介詞句“为代表”が、また(57)では介詞句“给小王”が、動詞の後に置かれている。これらも意味的には結果を表していることに変わりはない。因みに例えば(55)のような「動詞＋“在”＋場所」の型は、“在”が単独で結果補語になり、動補連語「動詞＋“在”」が場所を表す目的語を伴っていると分析する方法もあり、これを結果補語に準じたものとして扱うこともできる。

[8] 数量補語

- (58) 我的同屋被狗咬了一口。(私のルームメートが犬にがぶりと噛まれた.)
(59) 他过马路时被车撞了一下。(彼は道を渡る時に車にはねられた.)
(60) 他被人打了一顿。(彼は人に殴られた.)

数量詞が動詞の後に置かれた構造である。これも、補語ではなく数量目的語であるとする分析もあるが、本稿では補語として扱う。これらの例の数量補語は、動作・行為を具象化する働きをしている。杉村(1982:73)では、「結果」の意味を拡大し、このような数量表現もその中に含めるべきだと指摘している。

[9] 目的語

- (61) 窗户被工人们刷上了油漆。(窓が労働者たちによってペンキを塗られた.)
(62) 箱子被他捆上了绳子。(箱が彼にロープで縛られた.)

(63) 我的汽车被人撞坏了车尾灯。(私の車が人にぶつけられてテールランプが壊れた.)

“被”構文においては動詞の表す動作の受動者は主語の位置に置かれるわけだが、中国語においてはそれ以外の様々な意味役割の参加者が目的語の位置に置かれることがある。どのような参加者が目的語に置かれるかについては先行研究もあり、興味深いテーマではあるが、ここではこれ以上議論に立ち入ることはできない。なお、このような目的語を帯びる型においても、(61)の“上了”，(62)の“上了”，(63)の“坏了”のように、結果補語もしくは方向補語に“了”がついた形も、目的語と共に用いられている点に注意すべきである。

[10] 連動構造の第2動詞句が後に続くもの

(64) 奶奶被他推着去了医院。(おばあさんは彼に押ししてもらいながら病院へ行った.)

(65) 房子被他请人装修了一下。(家は彼によって人に改修をしてもらった.)

この型はやや特殊であるが、“被”構文が第1動詞句の部分で言い切りになって文が終わることがなく、次の第2動詞句まで続く形である。例えば(64)では、述語動詞の部分が“推着”(第1動詞句)と“去了医院”(第2動詞句)からなる連動構造であるが、“奶奶被他推着”と第1動詞句の箇所まで文が終了せずに、第2動詞句が続いている。

3.2.2. 述語動詞の前に置かれるもの

[1] “所”

(66) 登山队被风雪所阻。(登山隊は風雪に阻まれた.)

“被”構文で動詞の前に助詞“所”を置くと、逆に動詞の後に付加成分を付けては文が成立しなくなる。このような“所”を用いた形は古代語からの名残で、極めて文語的な色彩を帯びる。この形で用いることができる動詞は“鼓舞，感动，吸引，控制，驱使，采纳，证明，发现，欺骗，误解，苦，困，迫，阻，动”など限られたものであり¹⁴、文語的な表現ということで他の形とは文体が異なるので、例外的な扱いが可能であると思われる。

¹⁴白晓红、赵卫编著(2007:148)を参照。

[2] 助動詞

(67) 你的话会被人误解。(あなたの話は人に誤解される可能性がある.)

(68) 我们谁也不愿意被人误解。(私たちは誰も人に誤解されたくない.)

[3] 連用修飾語

(69) 他的建议已经被领导采纳。(彼の提案は既に指導者に受け入れられた.)

(70) 他的意见已被上面采纳。(彼の意見は既に上司に受け入れられた.)

先行研究において「付加成分のない単独の動詞が“被”構文を構成する例」があるとされる場合、実際にはこれら2つの型が扱われることが少なくない。例えば張斌主編(2001:27)では、一部の“被”構文の述語動詞は付加成分の続かない単独の動詞(2音節に限る)であるとしてこのような例を挙げ、このような例においては、“被”の前に全て助動詞([2])か或いは時間を示す語句([3])があり、それが欠けていると文が成立しないという。

(71) 你的话会被人误解。(あなたの話は人に誤解されるかもしれない.)

(72) *你的话被人误解。

(73) 这些建议已经被市政府采纳。(これらの提言は既に市政府に受け入れられた.)

(74) *这些建议被市政府采纳。

[2]の助動詞が生起している例であるが、これらは受動者が動作主の動作の影響を受けて何らかの結果が生じたという実現済みの個別の出来事を表しているわけではなく、主語の位置に立つ受動者の性質を叙述している文である。特定の出来事を表しているのではないという点において、他の型の“被”構文とは明らかに異質である。

[3]の時間を示す語句は、その語句があることによって、“了”がなくとも出来事が実現済みであることを示すことを可能にしている。意味論的には、付加成分として“了”が用いられるパターンと同じ位置づけをすることが可能である。

よって、付加成分が述語動詞の前に置かれるとされることもある上記条件[1][2][3]は、全て何らかの意味で例外的であり、“被”構文を成立させるための述語動詞の付加成分とは、基本的には動詞の後に付加されるものと考えてよいものと思われる。

さて、“被”構文が成立するために述語動詞に様々な付加成分が生起することを見て

きたわけだが、ところが逆に、動詞の後に上記のような様々な付加成分が生起していれば、“被”構文が必ず成立するというわけでもない。例えば、張伯江(2001)によると、

(75) 我看见蓝天了。(私は青空を見た.)

(76) *蓝天被我看见了。(??青空は私に見られた.)

のように、(76)は動詞“看”に結果補語“见”，更には“了”と付加成分が生起しているにも関わらず、文として成立しない。これはなぜであろうか。

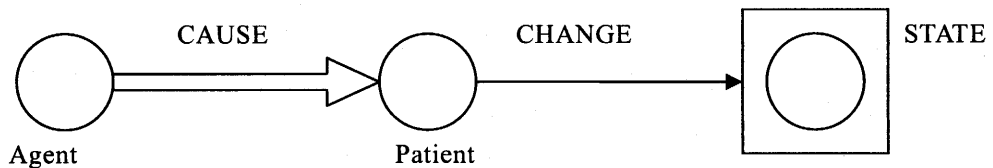
次章では、“被”構文において上記のような付加成分が何を意味するのかについて、行為連鎖モデルを使った解釈を施し、その形式と意味の関係を考察する。

4. 行為連鎖の観点から見た中国語の“被”構文

4.1. 行為連鎖モデル

本稿で“被”構文の分析に援用するのは、認知言語学の分野でしばしば用いられる行為連鎖(action chain)というモデルである。このモデルは、動作主から受動者に対して何らかの働きかけがあり、その影響を受けて何らかの結果が生じたという他動的事態を想定し、以下のような図でその他動的事態を一般化したものである。

(77)



この図は、例えば王さんがグラスを割ったといったような他動的な事態を一般的な形で(現時点ではまだ特定の構文には対応させずに)表すものである。まず、動作主(Agent)である王さんが、受動者(Patient)であるグラスに対してエネルギーの伝達(グラスに対して割れるような行為を行うこと)を行う。このエネルギー伝達の関係が CAUSE であり、図では二重矢印で表記する。次に、エネルギーを与えられた結果、受動者の状態が変化する(グラスが割れていなかった状態からグラスが割れた状態に移行する)。この受動者の状態の変化が CHANGE であり、図では一重矢印で表す。そ

の結果、最終的にある結果状態（グラスが割れてしまっている状態）が生じる。この結果状態が STATE で、図では四角囲みで表記する。¹⁵

4.2. 能動文と受身文

まず、「王さんがグラスを割った」という同一の他動的事態を、次の2つの文で表したとする。

(78) 小王打碎了杯子。(王さんがグラスを割った。)【能動文】

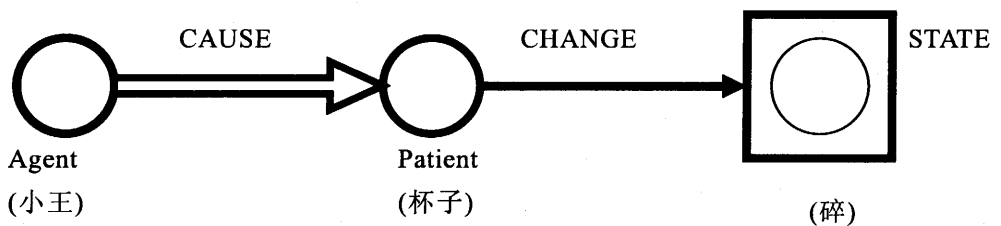
(79) 杯子被小王打碎了。(グラスが王さんに割られた。)【受身文】

この2つの文が表す事態は、客観的事実としては同じ事態を表しており、生成文法のような客観主義的な意味観に基づいた理論では、両者は意味からは自律した統語部門での形式的な規則で関係付けられてきた。

このような統語論の自律性を前提とした分析に対して、認知言語学のパラダイムに基づく本稿の立場によれば、統語構造は、話者による客観的事態の捉え方を反映していると考えられる。文法は意味から自律しているのではなく、話者による事態の概念化に動機づけられていると考える。

能動文“小王打碎了杯子。”は、以下のような図で解釈できる。

(80) 小王打碎了杯子。(王さんがグラスを割った。)

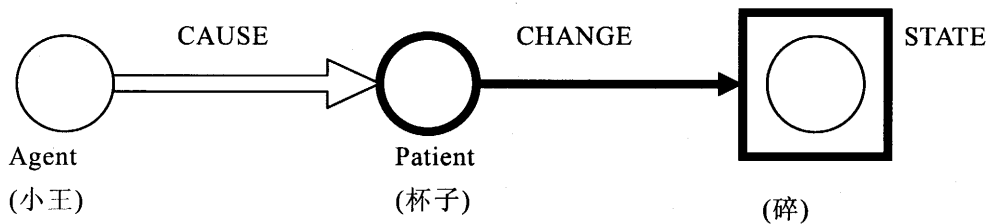


¹⁵ ラネカーの提唱する「action chain」の説明は Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar. vol. 2.* Stanford University Press. の 283 頁を参照。このような行為連鎖モデルを用いた様々な構文の分析の詳細については、中村編 2004 や谷口 2005 などを参照。本稿の図の具体的表記は、谷口 2005 に拠った。

(78)の能動文は、「王さんがグラスに対して何をしたか」という視点からの表現である。このような表現をする際は、行為連鎖の流れの中で、その連鎖を引き起こした先頭に位置する参与者（動作主）にまず注意が向けられる。よって動作主が最も認知的事実立ち（salience）の高い参与者として扱われ、その結果統語的にはそれが主語の位置に生起することになる。その動作主から引き起こされる行為連鎖全体がプロファイル（profile）される¹⁶のが能動文である。図(80)では、動作主から受動者への働きかけ“打”が CAUSE で表され、その働きかけを受けての受動者の状態変化を含めた行為連鎖全体がプロファイルされ、太い実線で示されている。

一方、受身文(79)“杯子被小王打碎了。”は、以下の図のように解釈できる。

(81) 杯子被小王打碎了。(グラスが王さんに割られた。)



受身文(79)は、「王さんが何をしたか」ではなく、「グラスがどうなったか」という視点からの表現である。受動者のグラスが被った変化を述べることに主眼を置いたこの表現を使う場合は、受動者“杯子”に認知の焦点が当てられ、動作主“小王”は相対的に背景化されてしまっている。図の参与者“杯子”の実線が太線になっているのはそのことを表している。認知的事実立ちの高くなった受動者が、統語構造上では主語の位置に生起し、受身文を作ることになる。

4.3. 結果段階の前景化——英語と日本語において

本稿では“被”構文においては、受動者だけでなく結果状態「STATE」の部分も認知的事実立ちが高くなっていると仮定する。「STATE」の部分の四角の実線が太線になっ

¹⁶ プロファイルとは、認知的事実立ちが大きく言語表現が直接指し示すことを言う。

ているのは、そのことを表す。¹⁷「STATE」とは、受動者が動作主による動作の影響を受けた結果生じた状態である。

他の言語においても、受動者が動作主による動作行為の影響を受け何らかの結果が生じるという点が、受身文成立の条件の一つとして挙げられることはよくある。例えば西村(1992:25, 31)は¹⁸,

(82) a. The pages were turned by George. (そのページはジョージによって繰られた.)

b. *The corner was turned by George. (その角はジョージによって曲がられた.)

(83) a. I was approached by the stranger. (私はあの見知らぬ人に近づいてこられた.)

b. * I was approached by the train. (私は列車によって接近された.)

(84) a. This bridge has been walked under by generations of lovers. (この橋は、幾世代にもわたって恋人たちが、その下を歩くところとなっている.)

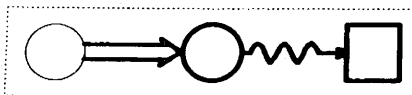
b. *This bridge was walked under by a dog. (この橋は、犬によってその下を歩かれた.)

のような a と b の容認度の差は、動作主の行為のもたらす受動者の変化を表すという受動文の本質の現れであるとする。注目すべきは、受動者の被る変化とは、物理的(客観的)な変化に限らず、心理的(主観的)変化も含んでいる点である。例えば(84)では、橋の下を1匹の犬が歩いて、その橋には何らの影響を与えることはないが、何世代もの恋人たちがその下を歩いてきたことによって、その橋が恋人たちにとっての名所になったなど、橋に特徴が付与されるという形での影響を与えることになる。よって(84) a. は成立する。

このような受身文における受動者の被る主観的变化について、坪井 2002 では次のように説明している。

¹⁷ 中村(2000:99)においても、その図の表記には本稿で採用した谷口(2005)のものとは若干の異同があるものの、受動者とその変化後の結果段階の両方がプロファイルされ太線で示される分析がなされている。

The town was destroyed (house by house). (受動態)



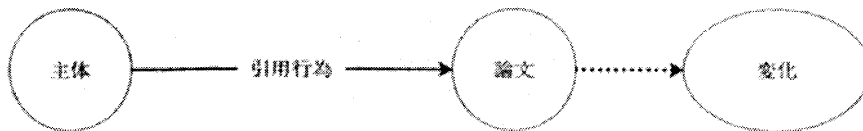
¹⁸ 以下の例は元々はポリンジャーの挙げた例。D. ポリンジャー著、中右実訳 1981『意味と形』(こびあん書房) 16-19 頁を参照。

(85) a. この論文はチョムスキーに数回引用された.

b. ?この論文は太郎に数回引用された.

(85) a. の成立について, 坪井 (2002:75) では次のような図で説明している.

(86)



すなわち, 論文がチョムスキーという著名な学者によって引用されることによって, その論文が価値のあるものとして確立し, 主語に何らかの属性が付け加わったという変化を含むわけである. また, 坪井 (2002:77) によると,

(87) a. *教室の入口の扉は太郎に蹴られた.

b. 教室の入口の扉は太郎に蹴られてあちこちへこんでいた.

においては, (87) a. の蹴るという動作だけでは受動者の扉の変化を含意していないが, (87) b. のように, 後続する節によって受動者に起きた変化を明示する形にすれば成立するのは興味深い.

4. 4. 結果段階の前景化——中国語において

中国語においても, “被” 構文においては受動者が影響を受けて変化していることを示す現象がある. 张伯江 (2001:520) によると,

(88) a. 他喝了酒了。(彼は酒を飲んだ.)

b. 酒被他喝了。(酒は彼に飲まれた.)

では, 通常の動詞述語文 a. では, 酒を全て飲んだという意味を含意する必要はないが, “被” 構文を用いた b. では, 酒を全て飲みきったという意味が含まれる. また,

- (89) a. 他骗了我，可是我没有上当。(彼は私を騙そうとしたが、私は騙されなかった.)
b. *我被他骗了，可是我没有上当。(*私は彼に騙されたが、私は騙されなかった.)

では、(89) a.の“他骗了我”では彼が私を騙そうとする行為を実行したというだけであって、その結果私が騙されたという結果段階までは含意しないが、“被”構文を用いた(89) b.では、私が騙されたという結果段階を含意するので、複文の後半節との論理的矛盾が生じてしまうという。

次の例は、この影響性が更に拡張した例である。

- (90) a. 你的密码被我知道了。(あなたの暗証番号は私に知られてしまった.)
b. *你的名字被我知道了。(あなたの名前は私に知られてしまった.)

(90) b.では、人の名前が他人に知られても、通常はそのことによって名前が影響を受けるということは考えにくい。それに対して、暗証番号というのは、いったんそれが他人に知られてしまうと、その暗証番号は効力を失ってしまうなど影響が非常に大きい。なお、この影響は、暗証番号自体がそのような(効力を失ってしまうといったような)影響を受けると考えてもよいし、そのことによって出来事の当事者(暗証番号の持ち主)が非常に大きな影響を受けると考えることも可能である。当事者が影響を受ける対象の場合は、言語化されている暗証番号はそのメトニミーであると分析できる。また、

- (91) a. 他的纸条被老师看见了。(彼のメモは先生に見られてしまった.)
b. *他的纸条被房上的猫看见了。(彼のメモは屋根の上のネコに見られてしまった.)

の判定の差も同様で、メモがネコに見られたからといってメモ自体何らの影響や変化も受けないが、先生に見られてはまずいようなメモが先生に見られることによって、出来事の当事者である「彼」は非常に大きな影響を受けてしまうといえる。

さて、“被”構文が成立するためには、述語動詞に前述したような様々な付加成分が付されるのが通常であるが、その付加成分の具体的な付き様は一様ではない。木村(1992)によると、

- (92) 小李被老王打了。(李さんは王さんに殴られた.)
- (93) a. ??桌子被小李拍了。(テーブルは李さんにたたかれた.)
 b. 桌子被小李拍了两下。(テーブルは李さんに二度たたかれた.)
- (94) a. *我被小王等了。(私は王さんに待たれた.)
 b. *我被他等了一会儿。(私は彼にしばらく待たれた.)

(92)において用いられている動詞“打”は非常に他動性の高い動詞で、その行為の実現自体が対象への強い影響を含意する動詞なので、付加成分としては“了”だけで十分文が成立する。ところが動詞“拍”では対象物への物理的な接触はあるものの、その結果対象物に対して“打”ほど強い影響を与えるものではない。その場合は(93) a.のように、付加成分として“了”をつけただけでは、文の安定性が低下する。ただそのような動詞でも、(93) b.のように数量詞“两下”を付加することで行為が有界の事態となって、対象物への具体的な働きかけを含む表現になるため、文は成立する。ただし、“等”(待つ)のような、対象物への影響を含意していない他動性の弱い動詞の場合は、(94) a.のように“了”をつけただけではもちろん文が成立しないばかりか、(94) b.のような数量詞を付加してもやはり文は成立しない。

(92)と(93) a.と(94) a.は付加成分は全て“了”であり、三者は形式面では同じである。その成立の容認度の違いを生み出しているのは、結果状態がどれほど含意されているかという、意味的側面に他ならない。

このような受動者の被る結果状態が明示される形式は、上記のような“了”や数量表現にとどまらない。

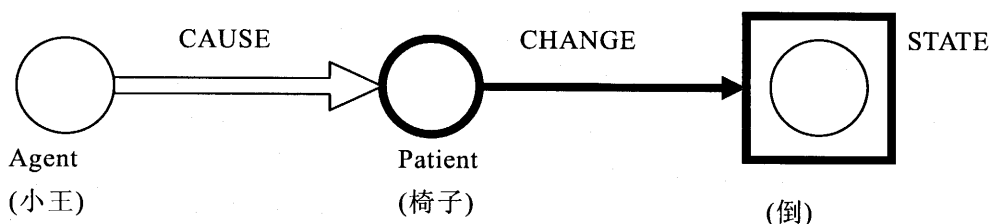
- (95) a. ?门被他踢了。(ドアが彼に蹴られた.)
 b. 门被他踢瘪了。(ドアが彼に蹴られてへこんだ.)
 c. 门被他踢得到处都是洞。(ドアが彼に蹴られてあちこち穴があいた.)

この例では、(95) a.のように、ドアが蹴られただけでは、受動者であるドアが影響を受けて何らかの結果状態が生じたということを含意しないため、不自然な文になるが、蹴られた結果「へこんだ」とか「あちこちに穴があいた」のような、結果状態を形式上明示すれば、自然な文となる。(95) b.では結果補語“瘪”が、(95) c.では様態補語“得到处都是洞”が、その結果状態を明示する役割を果たしている。

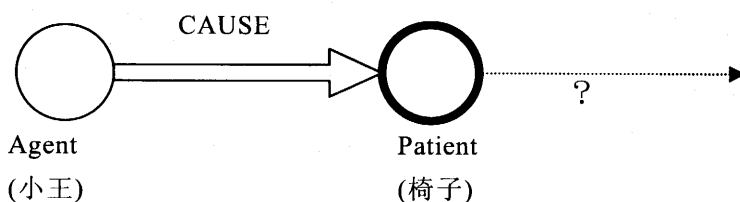
よって、(96)のように、受動者が被った影響としての結果状態を含むことが“被”

構文が成立する前提であり、形式上は動詞の後に“了”を有していても文が成立しない例は、意味上結果を含意しないため、(97)に示すように、“被”構文の事象構造として解釈することができないのである。

(96) 椅子被小王拉倒了。(椅子が王さんに引き倒された.)



(97) ??椅子被小王拉了。(??椅子が王さんに引かれた.)



4.5. 動詞が自動詞の場合

さて、ここまではその動詞の意味から、動作主から受動者に直接他動的な働きかけがある CAUSE リンクについて分析してきた。

しかし、次のような文では事象構造はやや異なる。

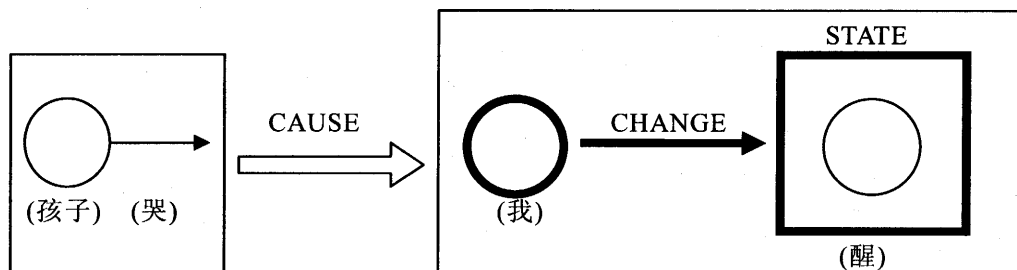
(98) 我被孩子哭醒了。(私は子どもに泣かれて目が覚めた.)

(99) 桌上的地图被风刮乱了。(机の上の地図が風に吹かれてぐちゃぐちゃになった.)

例えば(98)においては、“孩子”(子供)が直接“我”(私)に対して“哭”(泣く)という他動的働きかけを行ったということではない。先ほどの例では“打碎杯子”という複合動詞と目的語の組み合わせで他動的事態を表せたが、(98)ではそもそも“*哭我”という組み合わせがない。

このようなタイプの文は、次のような行為連鎖モデルにより分析する必要がある。

(100)我被孩子哭醒了。(私は子どもに泣かれて目が覚めた。)



“哭”（泣く）という動詞は自動詞である。「泣く」という行為は他に直接物理的に働きかける他動的な行為ではない。(100)は、(98)が、まず「子供が泣く」という出来事が発生し、その出来事が原因となって、「私が目を覚ます」という結果としての出来事を引き起こしたという、2つの出来事間の因果連鎖からなる使役的事態であることを示している。

このような、ある出来事が原因となり、その結果他の出来事を引き起こすという使役的事態においても、それが“被”構文として表現されると、主語の位置に置かれる受動者だけでなく、受動者がどうなったという結果状態にも認知的際立ちが与えられているという点では、“*我被孩子哭了。”と言えないことからわかるように、これまで述べてきた他動詞を用いた“被”構文と共通した現象であると考えられる。

述語動詞に付加成分として結果補語が付いている場合、動詞と結果補語の性質によっては、(100)のような、他とは若干異なる分析を加えなければならないものもあるが、他の構文との連続性を述べる主旨から、本節においては、この型もとりあえず受動者とその結果の部分に認知的際立ちが与えられるという共通点があるということを指摘するにとどめ、以下の議論を進めたい。

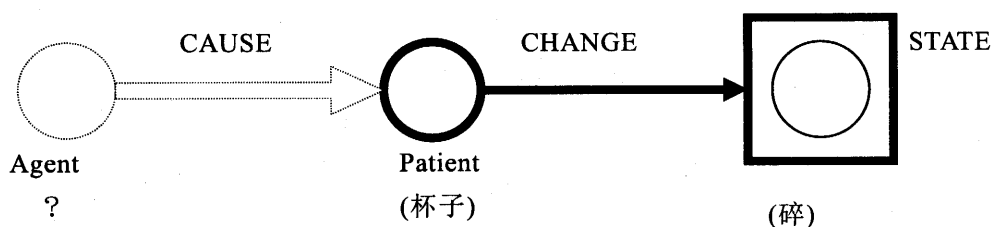
4.6. “被”の目的語の省略

さて、前述したように、介詞“被”の目的語の位置に立つ動作主は統語構造上に表出されないこともある。

- (101) 我的钱包被偷了。(私の財布が盗まれた.)
 (102) 敌人的油库被炸毁了。(敵の石油タンクが爆破された.)
 (103) 忽然, 门被撞开了。(突然, ドアがぶつかり開けられた.)

このような、動作主が統語上に現れない“被”構文は、以下のように分析することができる。

- (104) 杯子被打碎了。(グラスが割られた.)



動作主は文中に出現していないものの、動作主を導く介詞“被”の生起は、話し手が当該の事態を動作主によって行為を受けた受身の事態だと概念化していることを示している。しかし、その動作主が誰であるかということは、不明であるか、あるいは言及する必要がないかで、不問に付されている。従って、行為連鎖の流れのうち、動作主から受動者への他動的働きかけの部分は高い程度において背景化してしまっていると考えられる。図の点線部分はそのような背景化されたリンクを表している。

ところで、動作主が省略されないまでも、動作主が不明であったり不特定であったりした場合、それが名詞“人”で表されることがある¹⁹。

- (105) 我的车被人借走了。(私の車は人に借りて行かれた.)
 (106) 门被人锁上了, 我们进不去。(ドアが誰かに鍵をかけられて, 入ることができない.)
 (107) 做小买卖的本钱被人骗了。(小商いをやる元金が人に騙し取られてしまった.)

¹⁹詳しくは杉村(1992)の注2を参照。

このいわば「不特定動作主」を表す“人”は，“小王”のような特定の動作主から，そのような動作主を言わない表現まで動作主が背景化される過程の途中に，位置づけることが可能である。

(108)

杯子	被	<u>小王</u>	打碎了。(グラスが王さんに割られた.)	↓ 動作主の 背景化
杯子	被	<u>人</u>	打碎了。(グラスが人に割られた.)	
杯子	被	——	打碎了。(グラスが割られた.)	

以下では，「不特定動作主」“人”を使った“被”構文も，その連続体の中に含めて分析してみる。

4.7. 意味上の受身文との関係

ここまで，中国語の“被”構文は統語上動詞に付加成分が必要であることと，その意味論的動機付けについて述べてきた。

さて，“被”構文とは別に，意味上の受身文においても，述語動詞には類似の条件が必要になるという点が，先行研究において指摘されている。

木村(1981:30)によると，意味上の受身文においても述語動詞は付加成分が必要になる点では“被”構文と共通で，例えば以下のそれぞれの例で，結果補語を欠いた b.の方は，成立が困難であるという。²⁰

(109) a.那本书找到了。(あの本は探し当てられた.)

b.??那本书找了。(あの本は探した.)

(110) a.包裹寄走了。(小包は送られた.)

b.??包裹寄了。(小包は送られた.)

意味上の受身文の述語動詞の形式として，宋等(2007:115-116)は，以下の4種であるとリストアップしている。

²⁰ もちろん，受身文に限らず一般的に中国語の動詞述語文においては，単独の動詞だけでは文が成立しにくく，何らかの付加成分を後続させて動詞を複雑形式にする必要があるという傾向はある。陸俊明(1986)を参照。

[1] 述語が動詞であるもの²¹

(111) 错字全删除了。(誤字は全て削除した.)

[2] 述語が結果補語からなる動補構造であるもの

(112) 仗打完了。(戦争は終わった.)

[3] 述語が様態補語からなる動補構造であるもの

(113) 那张画撕得粉碎。(あの絵はばらばらに破ってある.)

[4] 述語が方向補語からなる動補構造であるもの

(114) 这些词必须收入词库。²² (これらの語は辞書に登録すべきである.)

また、外国人留学生向けの対外漢語教材に、意味上の受身文を小項目として教えているものもあるが、その文型の提示においても、動詞の後にその他の付加成分が必要になると明示されているものがある。²³

(115)

主语(受事) + 动词(带有被动意义) + 其他成分

そこに挙がっている例は以下のようなものである。

(116) 问题解决了。(問題は解決した.)

(117) 那辆车已经修好了。(あの車はもうちゃんと修理した.)

(118) 签证取回来了。(ビザは取って帰った.)

²¹ ただし動詞なら何でもよいわけではなく、制限がある。また、挙がっている例には実際には“了”が付いている点にも注意すべきである。

²² “入”をその意味から方向補語“进”に準じるものとして扱っているのかもしれない。

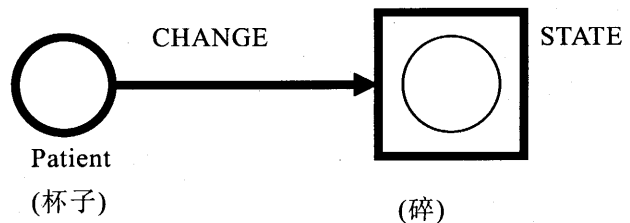
²³ 朱晓星主编(2002:154)。

(119) 那篇文章写得很好。(あの文章はよく書けている.)

(120) 这些图片都贴在展览大厅的墙壁上。(これらの写真は全て展览ホールの壁に貼ってある.)

さて、意味上の受身文は、“被”構文と同様に動詞の後に付加成分が必要になるという点において、これまで分析してきた“被”構文との間の連続性を見出すことができる。行為連鎖の観点から分析すると、意味上の受身文の表す事態は、次の図で解釈することが可能である。

(121) 杯子打碎了。(グラスは割れた.)



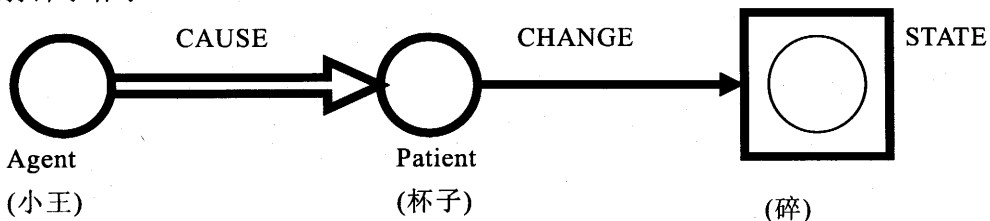
すなわち、意味上の受身文においては、発生した客観的な事実としてはたとえその出来事を引き起こした動作主が存在しているとしても、話し手がその動作主の存在を考慮に入らず、あたかも動作主なしで、受動者自身に自発的な変化が発生したかのような概念化をした表現であると言える。

行為連鎖の観点から以上の構文の連続性を今一度観察してみると、(122)のようになる。

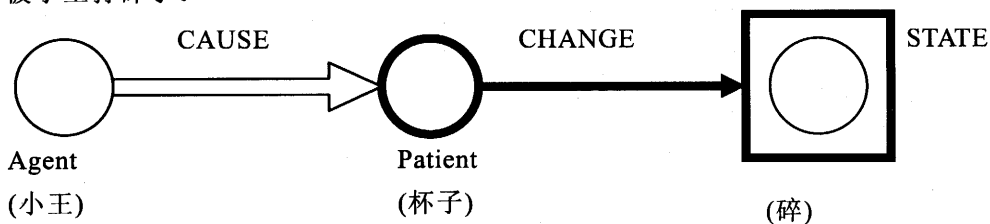
これらの構文は、受動者とその受動者に起こった変化をプロフィールしている点で共通点が見出せる。相対的に背景化されている動作主であるが、中でも“被”構文から、「不特定動作主」「人」を使った“被”構文、その“人”さえも省略された“被”構文、そして意味上の受身文にいくに従って、話し手による出来事概念化の段階で、動作主の背景化が段階的に進んでいることがわかる。“被”構文では、背景化されているといえども動作主が明示されているが、“被”の目的語が省略された“被”構文では、動作主は全く示されず、介詞“被”自身が、構文の表す事態が受身の事態であることを示すのみである。そして意味上の受身文に至っては、動作主は話し手の概念化の外に完全に押しやられ、受動者に発生した自発的な出来事であるかのごとく述べる文へと変貌しているのである。

(122)

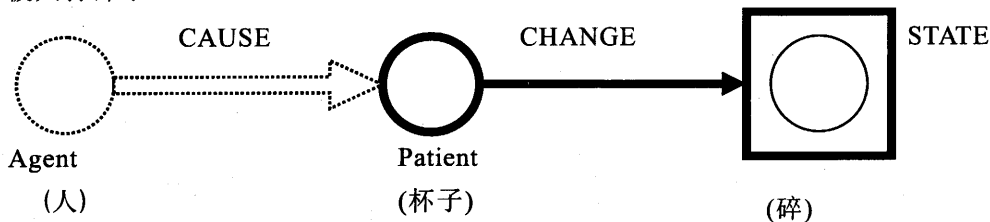
小王打碎了杯子。



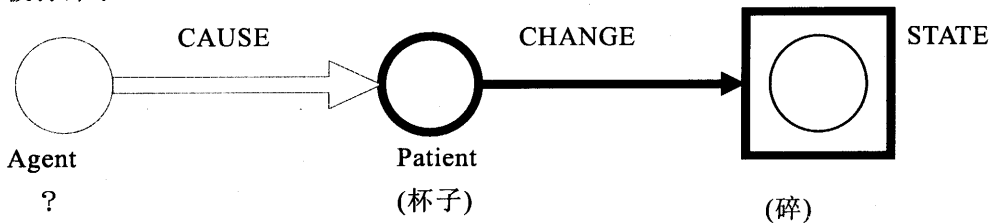
杯子被小王打碎了。



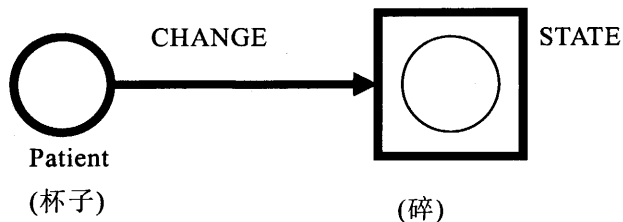
杯子被人打碎了。



杯子被打碎了。



杯子打碎了。



4.8. 意味上の受身文の教育レベルでの扱い

さて、本稿では“被”構文と意味上の受身文が行為連鎖という尺度から連続性を持つものとして統一的な解釈が可能になることを述べた。

しかし、中国語の初級段階の教育現場において、それをどう教えるかはまた別の問題である。本稿は、教育の場では、意味上の受身文を受身文として教えるのは適当ではないと考える。

周知のように、中国語の動詞述語文においては、主語と動詞の意味関係はそもそもが多種多様である。朱德熙(1982:95-96)の例を挙げる。

(123) 花猫逮住了一只耗子。(三毛猫がネズミを捕まえた。)【“花猫”：動作主】

(124) 衣服已经缝好了。(服はもう縫い終わった。)【“衣服”：受動者】

(125) 这个学生我教过他数学。(この学生は私は数学を教えたことがある。)【“这个学生”：関与者】

(126) 这支笔只能写小楷。(このペンは楷書しか書けない。)【“这支笔”：道具】

(127) 明天他们上广州。(明日彼らは広州に行く。)【“明天”：時間】

(128) 墙上挂着一幅画。(壁には1枚の絵が掛けてある。)【“墙上”：場所】

意味上の受身文とは、このような意味上多様な主語のうちの一類型（上でいえば(124)の例文に該当する）に過ぎない。様々なタイプの動詞述語文の中で、唯一このタイプのみをことさら受身文として特別視する必要性は考えられない。

この点をめぐっては、刘月华等(2001)が増訂本として発行され旧版の内容が大幅に改定された際の、意味上の受身文に対する扱いの変化に言及しておきたい。刘月华等(2001)は増訂本（新版と呼ぶ）で、元々1983年発行の版（旧版と呼ぶ）があった。旧版から新版への様々な大きな変更の中で²⁴、受身文の扱いにも変更があった。旧版では“被动句”という節があり、それが“意义上的被动句”と““被”字句”の2つの節に分類され、それぞれ解説がなされていた。ところが新版ではこの“意义上的被动句”という小項目が削除され、その結果、節のタイトルも“被动句”から““被”字句”に変更された。

旧版で意味上の受身文として扱われていた現象について新版でも言及がある

²⁴ 三宅登之(2002)「定番文法書的大幅バージョンアップ」、『東方』第252号。

(753-754 頁). 中国語に存在する大量の「話題-説明」文において, 話題の中には意味上受動者であるものが少なくなく, 文脈から受動者が話題の位置に立つことが要求されている場合は受動者を文頭に置けばよいだけであって, 受身を表す“被”“叫”“让”は必ずしも必要ないという.

(129) a. 任务完成了。(任務は達成した.)

b.??任务被完成了。(任務は達成された.)

(130) a. 粮食产量提高了一倍。(食糧の生産高が倍増した.)

b.??粮食产量被提高了一倍。(食糧の生産高が倍増させられた.)

(131) a. 信写好了。(手紙は書き終わった.)

b.??信被写好了。(手紙は書き終えられた.)

(132) a. 胜利的消息传遍了大江南北。(勝利の知らせは津々浦々に伝わった.)

b.??胜利的消息被传遍了大江南北。(勝利の知らせは津々浦々に伝えられた.)

これらの例で b.のように“被”を用いると, 非常に不自然な文になるというわけである.

現象についてはこのような言及があるものの, 意味上の受身文は受身文の項目から削除されたことは, 著者たちの教育の立場における主張を反映していると言える. 本稿もこの主張に意見を同じくするものである.

5. 終わりに

本稿は, 受身という事態を述べる場合, 現代中国語ではどのような表現の仕方をするかを概観し, その中での“被”構文の位置づけを確認した. 次に, “被”構文の述語動詞にどのような付加成分が用いられるかを記述し, その用いられる動機付け, そしていわゆる「意味上の受身文」との関係について, 行為連鎖という観点から認知的な解釈を施した.

今後は, 実際の中国語の“被”構文の使用状況, 特に動詞の付加成分の使用分布をコーパスを用いて調査し, それが中国語話者の受身的事態の捉え方をどう反映しているかを考察したい. さらに, 本稿では受身を表す介詞は“被”のみに考察対象を限定したが, 口語で多用される“叫”“让”についても, その使用実態を調査することを研究課題としたい.

参考文献

中文

- 白晓红、赵卫编著 2007『汉语虚词 15 讲』北京语言大学出版社.
- 陈力 2002「表被动时“被”与“让”的差异」,郭继懋、郑天刚主编『似同实异:汉语近义表达方式的认知语用分析』中国社会科学出版社, pp. 303-327.
- 杜荣 1993「汉语被动意念的表达和英语被动句的比较」,王还主编『汉语对比论文集』北京语言学院出版社, pp. 75-96.
- 范晓 2007「关于“被”字句谓语的语义特征」,邵敬敏、张先亮主编『汉语语法研究的新拓展(三)』东北师范大学出版社, pp. 375-391.
- 龚千炎 1980「现代汉语里的受事主语句」,『中国语文』第 5 期, pp. 335-344.
- 侯学超编 1998『现代汉语虚词词典』北京大学出版社.
- 李临定 1980「“被”字句」,『中国语文』第 6 期.(李临定 1994『李临定自选集』河南教育出版社, pp. 48-69.)
- 李临定编著 1999『现代汉语疑难词词典』商务印书馆.
- 李晓琪主编 2003『现代汉语虚词手册』北京大学出版社.
- 刘月华、潘文娉、故鞞 2001『实用现代汉语语法(增订本)』商务印书馆.
- 陆俭明 1986「现代汉语里动词作谓语问题浅议」,张志公主编 1986『语文论集(二)』外语教学与研究出版社, pp. 95-98.
- 陆庆和 2006『实用对外汉语教学语法』北京大学出版社.
- 吕叔湘主编 1999『现代汉语八百词(增订本)』商务印书馆.
- 木村英树 2005「北京话“给”字句扩展为被动句的语义动因」,『汉语学报』第 2 期.(邢福义主编 2006, pp. 242-255.)
- 齐沪扬主编 2005『对外汉语教学语法』复旦大学出版社.
- 杉村博文 2003「从日语的角度看汉语被动句的特点」,『语言文字应用』第 2 期, pp. 64-75.
- 宋文辉、罗政静、于景超 2007「现代汉语被动句施事隐现的计量分析」,『中国语文』第 2 期, pp. 113-124.
- 王还 1983「英语和汉语的被动句」,『中国语文』第 6 期.(王还 1994『门外偶得集(增订本)』北京语言学院出版社, pp. 132-151.)
- 邢福义主编 2006『汉语被动表述问题研究新拓展』华中师范大学出版社.
- 熊学亮、王志军 2004「认知维度的英汉被动句研究」,王菊泉,郑立信编『英汉语言文化对比研究:1995~2003』上海外语教育出版社, pp. 327-336.

- 张斌主编 2001『现代汉语虚词词典』商务印书馆。
- 张伯江 2001「被字句和把字句的对称与不对称」,『中国语文』第6期。(沈家煊主编 2005『现代汉语语法的功能,语用,认知研究』商务印书馆,pp.92-103.)
- 周一民 1998『北京口语语法:词法卷』语文出版社。
- 朱德熙 1982『语法讲义』商务印书馆。
- 朱晓星主编 2002『简明汉语语法学习手册』北京大学出版社。
- 和文
- 伊藤大輔 2004「“被”と自然受身文に関する一考察」,『言語情報学研究報告』No. 3, pp. 65-77.
- 木村英樹 1981「被動と「結果」」,『日本語と中国語の対照研究』第5号, pp. 27-46.
- 木村英樹 1992「BEI受身文の意味と構造」,『中国語』6月号, pp. 10-15.
- 木村英樹 2000「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」,『中国語学』247号, pp. 19-39.
- 中村芳久 2000「認知文法から見た語彙と構文:自他交替と受動態の文法化」,『金沢大学文学部論集. 言語・文学篇』第20号, pp. 75-103.
- 中村芳久編 2004『認知文法論Ⅱ』大修館書店。
- 西村義樹 1992「認知言語学序説一意味論の可能性(Ⅲ)」,『実践女子大学文学部紀要』第34集, pp. 17-39.
- 大河内康憲 1974「被動が成立する基礎—日本語などとの関連で—」,『中国語学』220号。(大河内康憲 1997『中国語の諸相』白帝社, pp. 115-134.)
- 大河内康憲 1982「中国語の受身」,寺村秀夫他編『講座日本語学 10 外国語との対照Ⅰ』明治書院, pp. 319-332.
- 讚井唯允・徐揚 1990「中国語受動文における“被・叫・讓・給”の互換性」,『人文学報』(東京都立大学)第213号, pp. 15-35.
- 杉村博文 1982「被動と『結果』拾遺」,『日本語と中国語の対照研究』第7号, pp. 58-82.
- 杉村博文 1992「遭遇と達成——中国語被動文の感情的色彩——」,『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』くろしお出版, pp. 45-62.
- 谷口一美 2005『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房。
- 豊嶋裕子 1988「“被”字句の成立条件にかんして」,『中国語学』235号, pp. 99-108.
- 坪井栄治郎 2002「受影性と受身」,西村義樹編 2002『認知言語学Ⅰ:事象構造』東京大学出版会, pp. 63-86.

现代汉语“被”字句的行为链模式

三宅 登之

本文从认知语言学的观点对现代汉语“被”字句进行了初步的分析。

本文首先对现代汉语中表示被动语态的句式进行了概观性介绍，并确定本文要集中讨论的“被”字句在现代汉语被动语态句式中的地位。

其次，本文对现代汉语“被”字句的结构和语义进行了讨论，并着重对“被”字句谓语动词后的附加成分加以了分析。研究结果显示：“被”字句的谓语一般不能是一个简单的动词，往往需要加上动态助词“了、过”、补语等，句子才能成立。“被”字句作为一种句式，要表达一个被动事件实现之后，受事者受到影响而发生变化或出现新的结果。“被”字句的谓语动词后要加附加成分，是有这样的语义动因的。本文从认知语言学的语法观出发，借助行为链模式(action chain)对“被”字句的结构(动词后面的附加成分)和语义(出现新的结果)之间的关系做出了圆满的解释。

文章最后还发现，“被”字句和所谓“意义上的被动句”虽然在结构上有所区别，但是从行为链模式的原则来观察这两个句式，可以显示出两者的语义结构有不少共同点，甚至可以把它们作为一个连续统来研究。